

# 都市との交流による 産業の活性化に向けて

～長沼町と道の駅～



レストランと売店がある道の駅「マオイの丘公園」のセンターハウス

札幌市からわずか30kmほどのところに位置しながら、広々とした田園風景を有する長沼町。札幌から一番近い道の駅があるまちでもあり、道の駅にある農産物直売所は、札幌市民にもすっかり定着しています。温泉、キャンプ場など、観光消費を受け止める施設をいち早く整備し、拠点整備によって、観光消費の受け皿を構築した長沼町の現在を取材しました。

## 観光施設を積極的に整備

札幌通勤圏でもある長沼町が観光の側面で注目を浴びるようになったのは、1987年にながぬま温泉がオープンしてからといえるでしょう。それまでは町内にある民間業者のハイジ牧場が唯一の観光拠点でしたが、ハイジ牧場の名は知っているものの、どここのまちにあるかということはいまだにあまり知られていませんでした。

ながぬま温泉は、町営でスタートし、その後レストハウスや浴場の増築、町内産品のPRを兼ねた物産館の建設など、さまざまな付属施設の整備を行い、現在に至っています。'92年には、都市との交流によ

って個性的な農山漁村づくりを目指す北海道開発庁のニューカントリー事業に取り組んだのを契機に、温泉の向かいにオートキャンプ場をオープンさせます。道内でも比較的早い時期にキャンプ場を整備したことと、翌年に日本オートキャンプ協会より4ツ星認定を受けたこと、さらにオートキャンプブームも手伝って長沼町の知名度はぐんとアップします。

また、'94年には民間の住友商事が中心となって設立した現地法人長沼開発（株）による民間のゴルフ場「マオイゴルフリゾート」が仮オープンし、その2年後に本格的にオープン、次いで道の駅の認定、パークゴルフ場のオープンと、さまざまな観光施設が整備されていきました。

### 長沼町の観光戦略として重要な道の駅

それまで町内の観光施設は、ゴルフ場を除いて町営で管理運営されていたのですが、これを見直すきっかけとなったのが、道の駅「マオイの丘公園」でした。

現在、道の駅がある場所は、廃校になった長沼第4小学校の跡地で、地元の農家から余った野菜をそこで売りたいという声があがったことが、道の駅のきっかけです。その声を受けて、地域で「旧長沼小学校跡地利用運営委員会」を組織。2年間の検討期間を経て、'93年に週末のみの営業で「ながぬま特産物直売所」がオープンします。さらに翌年には、ふるさと創生資金で「さわやかトイレ」を整備し、集客拠点として認知されるようになります。

これ以前の'91年に国道274号（石勝樹海ロード）が全面開通しており、337号との重複区間でもあるこの辺りは、長沼町としても戦略地域でもありました。千歳空港からも、また大都市・札幌からも近く、長沼町の玄関口として、あるいは長沼町の顔として十

分機能できる立地条件を備えていたからです。そこで考え出されたのが道の駅登録でした。農産物直売所は口コミでどんどん認知されるようになり、集客も増えてきていました。

一方で、当初は余剰野菜を販売していた農家も、直接消費者と接することで、ニーズに合った作物とは何かを学ぶようになり、質の高いものを適正な価格で販売すれば、消費者はしっかりと受け止めてくれるということを肌で感じ、余剰野菜という認識から質の高い野菜の販売へと直売所の位置付けも変わってきていました。そうした経過を地域としてうまく受け止めていこうと、道の駅認定を目指して取り組むこととなります。

道の駅を管理運営する場合、町直営で行う方法も考えられますが、長沼町が選択したのは、第3セクターでした。第3セクターは行政と民間の悪い側面ばかりが強調され、イメージはあまりよくありませんが、町営では予算のしぼりがあるため、例えば予想以上に集客があった場合に柔軟な対応ができないという悩みがあります。一方、民間主導であれば、長沼町として戦略的な観光振興エリアとしての役割がどこまで果たせるかという懸念もあります。

長沼町には、町内の団地を造成した際、不動産取得や売却を担うため'71年に設立された第3セクター（株）長沼振興公社がありました。しかし、団地造成後は大きな事業展開がなかったため、この公社を道の駅の管理運営に有効活用しようと、農協、商工会などの増資によって蘇らせ、民間の経営感覚と行政の視点をうまく連携させる組織にしようと考えたのです。

その後、「マオイの丘公園」は、センターハウスの整備や直売所の再整備、パークゴルフ場なども整備され、'96年に道の駅として認定されます。直売所の販売額は年々増え続け（表）、道の駅認定の2年後に2

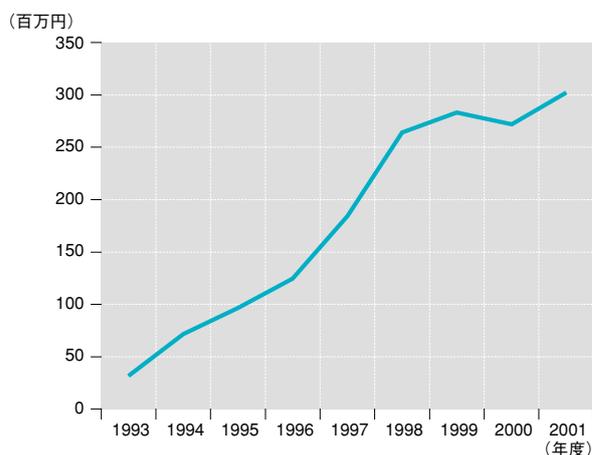


直売所スペースには現在八つの団体が出店。野菜のほか、酪農家の直売所もあり、ソフトクリームが人気に



山科常務は行政職員として商工観光課時代に公社の常務を兼務し、現在は公社の常務に専念。行政の視点と民間の経営感覚で公社を切り盛りする

表 道の駅農産物直売所売上推移



億円を超えるほどになりました。長沼振興公社の山科隆男常務取締役は「道の駅に行けば、長沼町産のものはほとんど手に入る」といいます。今では、直売所のためにわざわざ札幌からやってくる人もいほどの人気ぶりです。

また、直売所を訪れた札幌の団地住民が、生産現場を見学したいとお願いしたところ、生産現場の見学が実現し、その年の収穫野菜を札幌の団地に持ち込んで販売するなど、生産者と都市消費者の交流の場ができるなど、長沼町の基幹産業である農業と観光をつなげる機能を道の駅が果たしています。

### 公社が観光拠点施設を管理運営する要に

その後、地方財政の厳しさや民間と行政の側面を融合させた第3セクターの機能をさらに積極的に活用していこうと、それまで町営で管理運営していたオ



マオイゴルフリゾートにはゴルフ場のほか、テニスコート、ホテルなども完備されている

ートキャンプ場を2000年に、'01年にながぬま温泉をそれぞれ長沼振興公社へ業務委託することになります。また、2000年12月、バブル崩壊後の景気の低迷などによって、長沼開発（株）がゴルフ場の経営を断念し、全資産を無償で長沼町に寄付したことで、ゴルフ場の経営も'01年から公社が担うことになったのです。この際、北海道銀行からの増資を行い、公社の資本金は3,350万円となります。

公社では、初めてのゴルフ場経営でありましたが、徹底的な経費見直しを行い、会員制からパブリック制へ、また人員体制も徹底的な見直しをかけました。その結果、営業職員を設けず、冬場は最低限の人数で対応する、それまで住友系列から仕入れていたために高くなっていった経費を抑えるために独自の仕入れルートを確立するなどの努力で、黒字経営にこぎつけました。

また、公社は、現在町内に5カ所あるパークゴルフ場の管理運営も手掛けており、今や観光拠点施設を管理運営する重要な組織となっています。パークゴルフ場は、すべて公園内に設けられており、通常はお金を生みださない公園もパークゴルフ場の利用料金を徴収できるようになっています。公社では、公園管理も請け負っており、行政としては公園の管理運営を公社に任せられることができるというメリットを生んでいます。パークゴルフ人口の増加で、町内外から利用者は多く、特に芝の管理に細心の注意を払っている長沼町内のパークゴルフ場は、「芝がよい」と利用者から評判になっています。

### 地元雇用や地元調達の課題

町内の観光拠点施設を管理運営する長沼振興公社ですが、地元雇用や地元調達といった点では、なかなか難しい問題も抱えているようです。



長沼町のパークゴルフ場は芝がよいと評判。'02年に北長沼水郷公園のパークゴルフ場が増設され、18ホールから36ホールに

現在、公社の職員は多くが地元町民ですが、例えば夏場にパート雇用するゴルフ場のキャディなどの場合、28人のうち町内在住者はたった2人しかいないといいます。町内でキャディとして働く女性は多いのですが、そうした人たちはほとんど隣町で働くというのです。「互いに顔見知り合うと、ゆっくりプレイできないし、キャディ側も気を遣ってしまうからでは」と山科常務。確かに地方ではそういったことが考えられます。地方では町内だけで安定雇用を図るのではなく、広域的に協力しながら検討する視点も必要だということでしょうか。

一方、地元調達は、できるだけ地元を優先していますが、量の確保や価格の面などで、なかなか折り合いが付きにくいのが現実。例えば、道の駅や温泉のレストランで使う農産物は、米は100%町内産ですが、野菜などは必要なものが確保できないことや冬場の問題などがあり、多くが町内産というわけにはいきません。

最も頭が痛いのは、価格面のようで、例えば、温泉のレストランなどでは、町営のころは町内の業者を最優先していたのですが、どうしても価格が高くなりがちで、公社に管理運営が移った後は、さまざまな仕入れを見直すという厳しい局面もありました。町内の商工業者からは大変な反発があったようですが、商工業者の代替わりの時期であったこともあり、徐々に公社に対する考え方も理解されているのではないかと思います。

一方で、町内の農家グループが手作りで作った加工品など、希望があった商品の販売などは積極的に受け入れています。また、温泉のレストランでは、すっかり馴染みになったジンギスカンも提供しており、町内の有名な3社のジンギスカンを食べ比べるメニューもあります。

厳しい経済状況と地方財政のなかで、経費と収支

のバランスを取りながら、できる範囲で地域産業との連携を図り、長沼振興公社は現在黒字経営となっています。町営時代に減少傾向にあったながぬま温泉の入込数も公社へ移行後は増加傾向になっています。「特に施設を改築したわけではなく、職員に挨拶と清潔さを徹底させただけ」と、民間企業のノウハウが着実に成果となって現れているようです。

### さらなる観光消費を地域で受け止めるために

温泉、キャンプ場、道の駅、ゴルフ場、パークゴルフ場、民間の観光施設も含めると、年間延べ95万人が訪れる地域となった長沼町。「空港にも近い、札幌にも近いという立地条件を生かし、基幹農業をもっとうまく生かしながら、他の産業と連携させて両立させていくことがこれからの課題です。例えば、地場農産物の加工施設など、農産物に付加価値を付けていくことはまだまだこれからです」と企画振興課の堀米聡企画官はいいます。また、山科常務は「ここは都会から最も近い自然が残るまち。少し車で走れば田んぼもあり、農の風景があります。そのなかに観光できる拠点がうまく配置されていますから、札幌だけでなく、首都圏にも十分満足してもらえるものが長沼にはあると思います。東京からもわずか3時間です」と長沼町の魅力を語ります。

現在の一次製品の販売から付加価値のある商品開発によって価格へ転嫁させる、首都圏の観光客を受け入れて滞在型観光を増大させるなど、長沼町の観光産業はこれからも発展が期待できます。'99年12月には温泉排水を利用した融雪溝の供用が開始され、冬場のメインストリートも一変。街並みも観光客を受け入れる準備が整ってきました。

農業を核にして、これから長沼町がどのように歩んでいくのか。期待を持って見つめていきましょう。



「いい意味で町内のさまざまな産業の連携を図っていければ」と堀米企画官